

山形県民教連通信

Contents

<http://www.asahi-net.or.jp/~gy6e-kjm/>

2021.7.10 No.72

巻頭言「東京五輪への道」	...	1
「夏の学習会2021」の開催について	...	2
《特集》追悼 鈴木輝男先生	...	4
情野貞一	阿曾邦子	伊沢良治
澤辰夫	植松保信	奥山芳基
酒井枝里子	長南厚	福岡修三
実践紹介「さあ、学級づくりをはじめよう！」	...	10
本の紹介	...	12

山形県民間教育研究団体連絡協議会 通信
 <発行人> 山形県民教連事務局
 〒990-0044 山形市木の実町12-37
 県教組山形地区支部内
 TEL/FAX 023-631-2112/2126
 E-mail yamagata@yamagata-kenkyousou.gr.jp
 <編集人> 鬼島悦雄 kijima@email.ne.jp

巻頭言

東京五輪への道

県民教連事務局

田口 忠宣



* 6月の始め、山形県内での「聖火リレー」が実施される。また、オーストラリアのソフトボールチームが来日し、大会は目前に迫った。あと、2カ月を切っているが、未だに政府や関係者からの参加実施の骨子が明らかにされていない。その遅延は疑問だ。まさに、「五輪ありき・・・そのけ、そのけ五輪が通る・・・」という態である。NHKを筆頭にメディアも後押しして、黙して語らない。8割に近い世論・国民の反対・中止の声さえ、意に介していない。

安倍元首相は、「復興五輪で、人類がコロナに打ち勝つ証として見せたい...」と述べ、菅政権も引き継いだ。与党や財界人の多くも、「世界の分断からの良策で、歴史のレガシーになる・・・」とも言う。近代五輪の今は、果てしない商業・利権主義と“原点喪失”の構造を隠蔽しており、森氏の差別発言はその象徴的な一例に過ぎない。

終わりのない世界的なパンデミックの連続する中で、国内でも「新たな変異株の蔓延」「必死の医療現場の苦闘」「ワクチン・パニック？」の中で、五輪の強行突破の風は吹き荒れている。

* ドイツのA・シングレー氏は、「もっと五輪の歴史を、真摯に学べ！」と、無知な日本のメディ

アや大会関係者に警告した。象徴的な「聖火リレー」は、かつて、ナチスが命名して始めたもの、「祖国への自己犠牲精神」を広めるべく、ヒトラーの右腕だったゲッペルスによって、進められたものだという。近代五輪のクーベルタンは、ヒトラーに傾倒し、ナチスを讃え、アテネからの「聖なる火」として位置づけられた。一時、その事への批判もあったが、留保された。近年の五輪は承知のように、巨大広告企業や土建企業の利権構造や「テロを意図的前提とする“監視社会化”」等への肥大化が大きく、「民主主義の脅威」になっている。IOCも、かつて、先導する安倍元首相に、例の「アンダーコントロール」発言という「プロパガンダ」を願っていたとも論ずる指摘には脱帽するしかない。スポーツ観戦の大好きな私でも、その裏の大きな背景を、是非仲間に伝えたい真実でもある。

* 想田和弘氏は、近代五輪の持つ、今の「止まらなさを加減」（=どうにも止まらない？）について、原発と、映画の「タイタニック」を思い至ったという。（[週刊金曜日]5月21日1329号）驚きの視点である！そこにフロイトの「誤謬の訂正」という、深層心理が働いているという。まさに、そこでは“同じような過ち”に突進するのか・・・という危惧がある。

総じて、歴史の教えは嘘をつかないはず、私たちは大いに学ぶべきで、そこからの道『=方策』を探り出したい。

（6月6日記

「コロナ禍の平和教育」(3)

・・・街角の平和論)



© 2021 K. S. S.

山形県民教連事務局 / 東海林仁

東北地区民教連「夏の学習会2021」の開催について

参加のよびかけ

新型コロナウイルス感染症蔓延の長期化に伴い、今年度も東北民教研天童集会の延期を余儀なくされました。この間に私たち国民が体験している息苦しさは、感染者の増減で繰り返されてきた自粛の強弱や頻度ではありません。

民意の届かぬ政治、政権に歪められる行政、国民の命より五輪の強行開催、都合の悪いことは全て記憶の無くなる政治家と不正や巨悪を追及しない報道、未来を生きる子どもたちに必要なものは、どんよりとした閉塞感を切り拓く自由と希望であるはずですが、だからこそ教育に携わる私たち一人一人が声を上げましょう。声を上げるために学び合ひましょう。

対象者 東北各県民教連（協）会員 並びに目的に賛同する全ての方々

日時 2021年8月8日（日曜日） 午後1時20分より午後3時45分

会場 サテライト会場：山形市国際交流プラザ（山形ビッグウイング）中会議室
オンライン会場：Zoomミーティング及びYouTubeLiveにて

詳細は同封の案内チラシをご覧ください

第69回東北地区民間教育研究団体研究集会「天童集会」 第2回実行委員会の開催について

会員のみなさまへ

梅雨の末期も近づき、東北の地も大雨の続く予報が出されています。OBのみなさんは、既にワクチン接種を受けた方も多いかと存じます。現職のみなさんは、ようやく学校関係者に職域接種が進み始めている状況でしょうか。はじめに開催ありきの五輪強行によって、どれほどの国民が命の危険にさらされるのか、著しく想像力と知見を欠く現政権は、あたかも戦時の反知性主義政権に酷似してきました。まだまだ予断を許さぬ状況が続きます。酷暑に伴う熱中症も心配です。くれぐれもご自愛ください。

さて、2年に及ぶ延期を経て、来年度は標記集会が開催できることを願い、開催主管である私たち山形の実行委員会を下記要領で開催します。万障繰り合わせの上お集まりくださいますようお願い申し上げます。

日時 2021年8月8日（日曜日） 午後4時より午後4時30分

会場 山形市国際交流プラザ（山形ビッグウイング）中会議室

* 上記「夏の学習会2021」終了後になります。

内容 1 第69回「天童集会」概要の再提案について
2 実行委員会の組織機構と主な責任者について
3 その他について

山形県民教連

夏の学習会2021

2022年度は天童で東北のみなさんとお会いしたいですね！

2021年8月8日(日)13:20-15:45

Onlineで開催

サテライト会場 13:00受付開始
山形ビッグウイング4階「中会議室」
〒990-0076 山形市平久保100(山形国際交流プラザ)

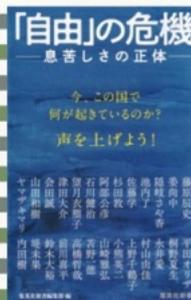
学習会当日プログラム

- 13:20 開会・山形県民教連会長あいさつ
- 13:30 リレートーク「社会・学校をとりまく息苦しさ」
①臨床心理士 ②少人数学級をすすめる会事務局長 ③労働問題相談員
- 14:10 講演 鈴木 大裕さん(裏面に詳細紹介)
教育研究者 現高知県土佐町議
元千葉県公立中学校英語科教員
米国立スタンフォード大学大学院(教育学修士)
同国コロンビア大学大学院(教育学博士)
(仮題)「コロナ後の学校が直面する公教育の危機に
教師が考え準備すべきこと」
- 15:40 閉会・お礼のことば

会員の参加費は無料

主催：山形県民間教育研究団体連絡協議会

本学習会は下記団体からの分担金と協賛金で運営されます
共催：山形県教職員組合山形地区支部教文部
協議：秋田県民間教育研究団体連絡協議会
青森県民間教育研究団体協議会
岩手県民間教育研究団体連絡協議会
宮城県民間教育研究団体連絡協議会
福島県民間教育研究団体協議会



● 鈴木大裕さんのプロフィール

高知県土佐町議員・教育研究者。神奈川県生まれ。16歳でアメリカの全寮制高校に留学。1999年スタンフォード大学大学院修了(教育学修士)。その後、日本の公立中学校での英語教諭を経て2008年に再渡米し、フルブライト奨学生としてコロンビア大学大学院博士課程に入学。16年からは高知県土佐町に移住し、教育を通じた町おこしに取り組む。
著 書「崩壊するアメリカの公教育—日本への警告」
共著書「学校と教師を壊す「働き方改革」—学校に変形労働制時間はいらない」
共著書「自由」の危機—息苦しさの正体—
集英社新書 2021.6.17新刊

● リレートークの話し手紹介

- 酒井さん 公認心理士・臨床発達心理士
発達障がいと判断され医療機関へ受診された子と保護者に向き合う。突然の一斉休校以来今まで、社会の変化と学校の困難に敏感な子どもたちに寄り添ってきた中で見えてきた事実をレポート
- 堀野さん 少人数学級実現県民の会事務局長
国が7年かけて実施する35人学級では解決できない課題を指摘しつつ、県民署名1万5千筆、国に対して30人学級実現を求める意見書提出の請願を展開。県内25市町村で採択された運動からの教訓をレポート。
- 早坂さん 労働問題相談員
雇止め問題や職場でのハラスメント、突然の解雇と仕事を諦めさせない闘い。コロナ禍を通して浮き彫りになった雇用の現実と雇用の脆弱性について、日々の相談事案からレポート。

● Zoomミーティングで参加

*音声とビデオはオフで入室下さい

ミーティングID: 869 2467 5969
パスコード: 942099

● YouTubeで参加

*下記URLでの観覧公開になります
https://youtu.be/m110_Kt0Qag

● サテライト会場で参加

山形国際交流プラザ
(山形ビッグウイング)
*4階中会議室 13時受付開始予定です
*マスク着用・事前の手指消毒にご協力下さい



問合せ先

山形県民間教育研究団体連絡協議会事務局
(山形県教職員組合山形地区支部書記局内)
〒990-0044山形市木の葉町12-37 県教育会館
TEL/FAX 023-631-2112/023-631-2126
E-mail yamagata@yamagata-kenkyousei.gr.jp
または
山形県事務局長 東海林仁 E-mailへ papa59.shoji94@gmail.com

《特集》 追悼 鈴木輝男先生

去る3月9日にご逝去された鈴木輝男先生の業績やお人柄を偲び、県内各地から追悼の文が多数寄せられました。「特集」記事として掲載します。(順不同)



鈴木輝男先生追悼のことば

米沢 情野 貞一

鈴木輝男先生、私は突然の先生の御訃報に接し、目の前が真っ暗やみになってしまいました。コロナの猛威に脅えながらも、必死になって「明日」を継続しながら生きようともがいている私たちには、いつも確かな指針を示して下さってきた尊いお命の存在を欠くことができない事だったからです。今は「人生百年」の時代に近づこうとしている時です。

少なくともあと十年は元気な姿で私たちを導いてくださるものと確信しておりましたのに……。誠に残念至極の極みでございます。

輝男先生、先生は米沢の四級へき地校綱木分校へ赴任なさいましたね。先生は、夕方になると「お晩になったなし。かがや(輝)く男がめえりました。寄せどごやえ。」と家々を訪問され、子どもたちの教育のことはもとより、部活や部落民の命と生活をどうしてゆけばよいかなどを、酒を飲み交わしあいながら語りあって下さいましたね。福島の方から、また米沢の方からも人々が行き交うもと宿場でもあった綱木部落の特に青年たちと一緒に、生活綴り方的な文集づくりを進めるなど、へき地に生きる青年たちへ、生きてゆく希望と確信を育て下さったものでした。

輝男先生、先生がご活躍なされた時代は、日本の無謀な戦争政策に対する多くの非難の声と、その声を押しとどめようとする声があつたあう熾烈な時代でもありました。また、日本の社会に民主主義をなんとか根づかせ、新たな日本をつくらうとする声と行動を起こす人々が立ち上がった時代でもありました。こうした時代に、先生は、米

沢や県教組の青年部長、書記長、全山形教組委員長を歴任され、民主的な教育への取りくみと、ひたいに汗して働く人々の人権と生活確立の取りくみに没頭されました。特に人事闘争と「三十人学級実現」への取りくみでは、組合員だけでなく、多くの人々を結集されて所期の目標実現へと邁進され、目的を果されてこられました。ありがとうございます。

輝男先生、先生の演説やお話はいつも引き付けられるものばかりでした。勝見先生などは「輝男の『黄色い声』が出てこないと本ものでない」と評されることがありましたが、お話の核心部分に入った時の声(こわね)は今も私の耳にも残っております。「情野くん:」と呼びかけてくださる声は今にも聞こえてきそうな気もいたします。

輝男先生、これからも米沢と山形県の教師と民衆の取り組み、命と生活の全(まっとう)御見守りください。



鈴木輝男さんを偲んで

北村山 阿曾 邦子

彼の訃報に接して、あ、山形の巨星がまた一ツ消えたか、と思った。彼とは山大教育学部の中学コースで同級だった。私たちは戦後間もない昭和5年、新しい学制になって二年目に入学した。まだ大学の内容も充実してなく休講が多々あった。私の生家は高畠で駅から遠かったのですぐ女子寮に入りそこから通学したが、輝男さん達米沢衆は電車で山形駅から歩いて通学しているグループだった。一般教養が終わって輝男さんは美術と社会科を専攻。私は迷った末社会と理科を選んだ。社会科の講座で何度か同教室で講義を受けた。特に目

立つ存在ではなかった。戦後の教員不足のためか二年で修了という制度があり修了式後の謝恩会の席上、彼は突然壇上で大演説を始め、内容は忘れたがびっくりした記憶がある。彼は米沢奥地の中学、私は高畠中学に採用となった。彼は間もなく県教組の青年部長として専従となり、それ以後、当時すでに教育行政の反動化が激しくなるなかで民主教育を守る、また政治革新のための活動家、リーダーとして生涯をおくった。

東北民教研上山集会で当時東北大学教授桑原武夫先生と輝男さんが大論争したというニュースが聞こえてきた。私など集会で発言することさえできないのに何とすばらしい人だろうと思ったものだった。いろいろな運動、闘いの多い時代でもあり、いつも彼はその場でリーダーとして活躍していた。一面大変人情に厚く人の世話をよくみた人でもある。私の息子の選挙にも何度も応援にきて下さったり、平野勝澄さんが真室川に移住し選挙に臨んだとき、私に「平野さんの第一声にぜひ参加してほしい」と電話があった。当日、すごい吹雪のなか、彼は山形から真室川に駆けつけてくれた。彼の優しさの一面を感じたことを思い出します。

彼はよく「民主連合政府ができるのを見届けてから死ぬ」と言っておりましたから無念だと思えます。彼の志を胸に今後努力することが彼への一番の供養と思えます。輝男さん！長いことほんとお疲れさまでした。ゆつくりお休み下さい。心よりご冥福をお祈り致します。



鈴木輝男先生追悼文

東置賜 伊沢 良治

鈴木輝男先生との出会いは、県の青年教研集会の分科会であった。正確な分科会名は忘れたが、確か「地域と学校」に関する分科会であった。私はその分科会に青年団の学習活動のレポートを提出していた。当時、新規採用2年目か3年目であった。学習活動のスローガンは「みんなで、みんなが」であった。この言葉は鈴木輝男先生のものであるとは知らずに採用した。私のレポートに何かコメントしていただいた記憶はないが、その日の

夜に米沢支部の同級生のO氏から、「輝男先生が『地域と教育』の分科会にいいレポートがあった。地域の青年と学習活動を進めているレポートだ。」と、私のレポートを評価していたとの話であった。場違いのレポートかとも思ったが、地域の教育を進める取り組みとしてとらえられたことを安心と同時に喜んだ。「みんなで、みんなが」という言葉はやさしく、深い意味を持っている。この言葉を生み出した輝男先生は教育者と同時に組織運動の先達でもあった。

二つ目の印象は、山形県教職員の実践講座の開催である。教職員組合が教研集会を毎年秋に開催するのは年中行事であるが、教職員の力量を高めるために県下の全教職員対象に組合または組合員が実践講座を開催するのは珍しい。実践講座の場合は、各民間のサークルが開催するのが普通である。それを組合が後援する。この実践講座は輝男先生が米沢支部の書記長から県教組の教文部長になってからのことである。主催は県教組か実践講座実行委員会だか定かでないが、この実践講座開催の先頭かつ中心にいたのは輝男先生に間違いのない。上山の村尾旅館を全館貸し切って一泊の学習会である。全体講演もあり民主的学校づくりを提起し、子ども・保護者・地域住民とともに創り上げる学校、その中核に教職員の奮起が訴えられた。全体会も分科会の講師も当時の最高レベルの名だたる実践家であった。現場の教職員にとって大変魅力的な学習会であった。山形県内で全国の到達点に学べる期待と充実感があった。輝男先生は教職員組合という労働組合を権利の追求にとどまらず、教育の使命である子どもを主人公にする教育、文化の香り高い教育運動を牽引した稀な教育実践家でもあった。

第三の印象は、輝男先生が他の青年教師と共に取り組んできた米沢の教育実践と教育運動である。輝男先生が青年教師時代、学校づくりにとどまらず、地域の青年や住民と共に生活記録運動等、深く地域に根を張って戦後教育を進めてきた。三沢西部中学校の生徒生活協同組合などは、生徒をまさしく学校生活の主人公に位置付け、生活と教育を結びつける生きた教育であったと考える。現実から目を離さず、観念的・抽象的な理念や指導に異議を唱え、あくまでも子どもと学校現場から考える現実主義者であり、生涯をかけて求め続けた誇り高さ理想主義者でもあったと思う。



輝男先生と 「さんさんプラン」の誕生

山形 澤 辰夫

鈴木輝男先生が亡くなりました。

輝男先生の名前は、私が米沢に新採教員として赴任して初めて知った。当時、県教組教文部長をされており、先生の話を知ると教育に対する熱い想いを感じるのであった。米沢に居を構えていた私はその後、米沢市立関小学校綱木分校に転動した。輝男先生がこの分校で教鞭を執られていたことを知り、ますます輝男先生のことを意識するようになった。

輝男先生との一番の思い出は、本県独自の少人数学級、いわゆる「教育山形さんさんプラン」実現に向けた県民運動だ。

私は、1994年に県教組山形地区支部書記長となった。そのころ不登校や学級崩壊という状況がジワジワと全国へ広がっていた。過密化したカリキュラムと多人数学級では拾いきれない多様化する子どもの背景が深刻さを増し、本県もけっして例外では無かった。その後、支部長となつてからの1997年「30人学級実現山形県民連絡会」が発足した。教職員組合の組織内運動だけでは限界があり、幅広く県民に呼びかけた運動にしようとしたのである。県内全ての自治体議員や教育関係者への賛同呼びかけ人代表となられたのが、輝男先生だった。

この運動には実に2,000人も賛同が集まり、当時県内唯一の教員養成学部を有する山形大学との連携も実現した。山形地区の事務局長を引き受けた私は、旧東南村山管内5市町すべてに地区連絡会を結成した。中でも中山町は、会派に関わらず殆どの議員が賛同者となってくれた。学年40人単学級の瀬戸際であった豊田小1年生保護者の要求が際立っており、校長の許可も得て県教委との交渉を申し込み、実態を保護者から県教育長に伝えようとした。保護者ととも県庁へ出向いた時、初めに通された部屋は「書庫室」であった。その時、県教委幹部職員を叱責した輝男先生の言葉が忘れられない。

「ふざけるんじゃない。今日は組合の交渉に来たのではない。ここに集まった人々は皆、県民の一人として来たのだ。子どもの保護者・県民に対してこの様な所へ案内するとはどういうことだ!」

県教委はすぐさま非礼を謝罪し、あらためて一同を教育長室に案内した。あの迫力と気概に今も心が熱くなる。

こうして1998年、県教委は「やまびこプラン」を発表した。大規模校の低学年で40人程度となる学級に対して非常勤講師を配置。非常勤講師も担任をして良しとし、少人数学級への足がかりとなった。特筆すべきは小規模校にも関わらず豊田小にもこの非常勤講師が配置されたのだ。保護者・地域と連携した県民運動とはなんと素晴らしいものかと実感した。

それから3年後の2001年、県知事選挙において輝男先生が「県独自で30人学級の実現」を第一公約として立候補された。選挙には敗れたものの当選した高橋和雄氏から「鈴木候補の公約を使わせて頂きたい」と申し出があったという。2002年、全国初となる本県独自の少人数学級編成「教育山形さんさんプラン」はこうして産声を上げた。

後年、輝男先生のところへ「少人数学級実現までの山形の県民運動を紹介してほしい」と岩手県で同様の運動に取り組んでいた団体から要請があり、「澤君、君が行ってこい。」と言われ、岩手大学を会場に講演させていただいた。河北新報でそのことが報じられ「澤辰夫」をWEB検索すると「山形県で33人学級実現に努力した人」と、10年間ほど掲載されていた。輝男先生に申し訳ない気持ちでいっぱいである。



激動の時代が生んだ偉大な人

北村山教職員組合執行委員長 植松 保信

輝男先生との一番の思い出は、30年ちょっと前(1989年度末)の最後の県教組役員選挙です。執行委員長に鈴木輝男先生、副委員長に塩野俊治先生、そして書記長にわたくし植松保信が立候補したのです。若輩のわたくし(当時39歳)が輝男

先生と一緒に立候補できるなど、今でも誇りに思っています。労働戦線の右翼的再編により生まれた「連合」への加盟をめぐる選挙戦でした。わたくしたちは1年ほど前から、輝男先生の指導のもと「連合」ノー実行委員会を立ち上げ、私はその事務局長として、山形、米沢、東置賜、北村山、田川など、「連合」ノーの全県的な広がりを創り出していました。そして、県教組の輝かしい歴史と伝統を引き継ぎ、県教組の統一と団結を守るために、「連合」には加盟せず、組合員の十分な論議を重ねて決めていくことを提起したのです。しかし、残念ながら惜敗に終わりました。

次に、県教組執行委員会のことです。1987年度末の県教組役員選挙によってつくられた県教組執行部は、それまでの逸見敏、鈴木輝男体制の闘う県教組ではなくなっていました。わたくしたちは、子どもたちの確かな学力と生きる力を育み、教職員の要求を実現するための方針をつくり上げるために、県教組執行委員会での激しい議論を重ねました。その時の方針づくりや実際の運動の推進なども、すべて輝男先生の指導と助言がありました。この時期わたくしたちは、山形の遠藤先生、東置賜の伊沢先生、田川の長南先生、米沢の福岡先生、そして北村山の植松がグループをつくって活動していました。そのグループの学習会や会議を何度も持ちましたが、輝男先生はいつでも的確な指針を示してくれました。ある時などは、輝男先生が脳梗塞で倒れられ、入院している病室まで押しかけて、ベッドの周りで議論をし、指導や助言を求めたこともありました。

最後に、山形県教育文化研究会議のことです。県教組の「民研」が形骸化する中、それに代わるものとして輝男先生が立ち上げたものです。教育実践も教育運動も「中央の真似をするな。山形県の実践をしろ」が輝男先生の口癖だったような気がします。そのため教文研では、山形県の子どもの実態、山形県の教職員の实態と要求などをリアルにつかむことから始めました。そして、5年に一度くらいのペースで「山形県の子ども白書」を発行しました。こうして、山形県の子どもや父母・教職員の实態から出発した教育実践や教育運動を展開するための研究をすすめることができました。

輝男先生は、激動の時代が生んだ偉大な人です。本当に大切な人を失いました。まだまだ学びたいことがたくさんありました。輝男先生、ご自身の

教育実践や教育理論をまとめて出版してほしいとお願いしたではありませんか。残念でなりません。



鈴木輝男先生との思い出から

米沢 奥山 芳基

1978年から4年間県教組本部に勤務しましたので、書記次長兼情宣法制部長であった輝男先生とはその間「同僚」でした。そのころは、女性教師に対する「50歳肩たたき(退職意向打診)反対闘争」「主任制度反対闘争」など激しい闘いの連続で、県庁内座り込みやストライキ(29分カット)を配置して闘った最後の時代でもありましたが、輝男先生は常にその先頭に立っていました。組合員の要求実現のために、当局を舌鋒鋭く論理的に問い詰める姿に人間的な迫力を感じたものです。

上記のような、所謂「労働組合運動」とともに輝男先生が教文部長として力を発揮された領域が「教育文化運動」でした。県下各支部から参集した実践レポートをもとに研究・討議を行う「県教研」がメインでしたが、その土台となる実践・研究の基本方針を提起するのは教文部長の輝男先生の役割でしたので、現状の分析に始まるその確かな提案内容に毎年感心させられました。

また、1980年代には「春の教育実践講座」と銘打って3月下旬に現職教職員を対象に全県から300名規模の一泊学習会を組織しました。全国的に有名な実践者による記念講演で感動を味わい、課題別に20に及ぶ講座・分科会を設定し、そこに講師・助言者として歴教協・数教協・日作・全生研・科教協などの民間教育団体に所属する錚錚たる実践家や研究者を招き、一泊して親しく夜の部も実践交流を進めました。本物の教育実践とはこういうものかと心震える思いをしたのは私だけではなかったでしょう。数年間この取り組みを続けた結果、県下各地の教育サークルが活性化したほか、特に青年教職員層に教育実践上の大きな影響を及ぼしました。これも輝男先生の大きな功績の一つだと思います。

さてもうひとつが「地域の力で学校・教育を守ろう」との取り組みでした。忘れもしない温海町立岩川小学校統廃合反対闘争です。私的にはその前年に?東置賜の川西町で小中学校の統廃合計画に反対する闘争の経験はあったものの、この岩川小統廃合反対闘争の中で「地域と教育」との関わりを本質から捉えることの大切さを改めて教えていただいたと思っています。「学校は地域の宝ものである」をスローガンに、この小学校の卒業生でもある部落内のお年寄り達に文集づくりを指導している輝男先生の姿が思い出されます。街宣で狭い町を回れば畑から駆け寄って手を振ってくれた地域の皆さんと交流する輝男先生の姿が忘れられません。

以上、組合専従であった時代の思い出から雑駁な文章を書いてしまいました。これでお役御免とさせていただきますと思います。苦笑している輝男先生の姿が見えるようです。長期にわたるご指導ご鞭撻に感謝申し上げます。有難うございました。安らかにお休み下さい。



追悼

山形 酒井 枝里子

輝男先生に初めてお会いしたのは、私の新規採用者研修会の時です。輝男先生は当時、県の教職員組合の役員として（確か書記長）、新米教員の私たちに県教組の歴史や組合の役割などを力強く話されました。

北方性教育運動の流れを引き継ぎ、教職員の良心を集める場があることを感じました。

その後、県教組の大会や教育研修会等々でお話をお聞きする機会が増えていくことになるのですが、常に運動の中心となってよい働き場を保障するために情熱を注いでおられました。

そして、私が最後にお見かけしたのは、母が入院したため通っていた病院でした。スタッフと思われる方と一緒に歩いていらっしやう姿をお見かけし、輝男先生もここに入院されていることを知りました。

リハビリに熱心なその病院では、リハビリセン

ター内での活動に加え、作業療法士等の方とともに、施設周辺を歩く患者さんの姿をよく見かけます。輝男先生も回復に向け取り組まれている姿に敬意を覚えました。

廊下ですれ違ったときがあり、「輝男先生！」とお声をかけると、こちらを見て会釈なさいました。誰であるかは、はっきりしなかったのかも知れません。直接お話ししたことのない私なので、「先生」と声かけしたことで「教育関係の誰か」と感じられたのではないのでしょうか。看護師さんに「お知り合いですか」と尋ねられたので、私は、「大先輩です」と答えました。

訃報をお聞きしたとき、大きな長い戦いを一つ終えられたのだと思いました。

先生の後ろに多くの仲間が正義を求め、良心を信じて歩いていきます。



鈴木輝男さんのこと

田川 長南 厚

36歳のときに組合員800人の田川地区支部の、専従書記長に8票差で当選したとき、鈴木輝男先生は山形県教組副委員長だったと思うが、ちょうど「連合」が作られようとした頃で、県教組執行委員会はいつもこのことに関する論議は避けられなかったように記憶している。輝男先生は議論の柱をいつも示してくだされ、主導されていたように思う。

20代で温海川小学校（3級へき地）に勤めていた時、岩川小学校廃校反対の闘争を導いてくれたが、温海川小学校に眞壁仁氏を連れてきてくれたことがあった。輝男先生がいなければ、あのような闘争はできなかったと思う。

会議では筋の通った意見を貫かれていたが、たまに一緒に飲むときは優しい笑顔で、話を結構聞いてもらった。学校事務職員であった私の妻が、職場で大変なのではないか、なども心配してくれた。

私が、好きな山の話をしたこともあり、「山を仰ぎ 山と語れば 青雲湧く」と、色紙を書いた。また、52歳で退職して山や森林に関わることを決意したときには、「行け 金色の翼に

のって」と書いていただいた。私の大事な宝物である。

山形県が学校の「さんさんプラン」を策定し、全国に先駆けて33人学級を実現させたのは、輝男先生が県知事選挙に立候補されて公約に掲げ、大奮闘されたことが発端だった。

輝男先生は、県教組運動から県の教育行政を、県民の要求実現の方向に大きく動かす、ほかの人には決してできない仕事をなさったのである。輝男先生、ありがとうございました！



「さすが、テルオ先生」 = テルオ先生の思い出 =

米沢 福岡 修三

2013年2月、テルオ先生を後部座席に乗せて、国道13号線を北上していた。午後2時ごろ、東根を通過するころになって、午前中から降り続いていた雪がますます激しくなってきた。その年は全国的に大雪の年で、山形も例外でなく、特に2月は最も積雪の多い節である。ハンドルを握り、「テルオ先生、ずいぶん降ってきたよ、大丈夫かな？」と、声をかけても返事がない。バックミラーをちらっと見たら、どうやらお昼寝のようだ。さすがテルオ先生。どんな大雪であれ、動じないようである。話し相手もなく、すぐに前方に注意し、運転に集中した。どうやら尾花沢あたりまでは来たようだ。大雪で微かに見えた道路標識でそれが分かった。山形の山教組の書記局を出発して優に3時間は経過している。

これから行く目的地は、真室川である。一昨年まで山教組の書記をしていた平野勝澄氏が同町会議員選挙に立候補するので、その事務所開きに顔を出すためである。平野氏を議員にと勧めた張本人がテルオ先生である。日本共産党からの出馬である。平野氏は1年以上も前から住居を真室川に移し、地域住民とともに暮らしや福祉の相談活動を続けてきた。テルオ先生としても、また、山教組現委員長の私としても応援しなければならないのである。とはいえ、運転手の私は無事に目的地に着けるかどうかだけが心配である。前方の車は先ほどからストップしたままである。どうやら渋

滞のようだ。「テルオ先生、真室川まで着けるかどうか、わかりませんね。」と、再び声をかけると、懐から何かを取り出し、「委員長、食べるか？」と、私にあんパンを突き出してきた。(テルオ先生はあづきが好きである。)さすが、テルオ先生である。この大雪にも拘わらず、ちゃんと食べる時は食べる。知事選を選挙参謀として、また、自ら知事選候補として大雪の中、全県を駆け巡った人物はちがうと、後から思った。今は、運転に集中である。猛吹雪で視界ゼロ。前方のストロップランプも見えない。路肩に駐車して雪が途切れるのを待つ以外にない。

結局、平野氏の選挙事務所については夕方の5時近く。地元後援会の方々はずでに集まっていた。よく見ると、前委員長の情野貞一氏と共産党の本間県委員長が同席していた。まだ、事務所開きのセレモニーは始まっておらず、どうやら我々の到着を待っていてくれたようだ。平野氏本人の気遣いもあつての対応か？ テルオ先生が事務所に入ると全員総立ちで、「大雪の中お疲れ様です！」と、口々にあいさつ。さすが、テルオ先生である。テルオ先生自ら10分程度の挨拶をして、平野氏の人となりや、立候補するに至った経緯について話をした。それを待つ私は、話を聞いているところではない。帰りの運転のことだけが心配で、時計ばかりを気にしていた。大雪のこともあり、早めに事務所を後にした。車中、テルオ先生は、私が眠くならないように気遣ってか、組合のこと、北方性教育のこと、関わった人物のエピソードなど、いろいろと話をしてくれた。さすが、テルオ先生である。無事、山教組の書記局に帰ってきたのはすでに暗くなってからの時刻だった。





「学級づくり(集団づくり)」って何?・・・ さあ、学級づくりをはじめよう!

平和と民主主義を築く国民・市民を育てるために

山形県生研・山形サークル 設楽 隆雄

69号「コロナに負けないサイレント集団遊び」、70号「ビー玉パーティ」に続いて、今号から数回に分けて全国生活指導研究協議会(全生研)の学級づくりを掲載させていただきます。この通信は年3回の発行なので適時性がありませんが、よろしくお願いします。

なお、この記事を読まれて興味をもたれた方、もっと知りたいと思った方は、最後に各地区の連絡先を掲載していますので、問い合わせてください。

1. 教師の使命は、平和を求め、民主的な人格をもった子どもの育成です。

教育基本法前文に教育の目的として「～民主的で文化的な国家をさらに発展させるとともに～」、そして第一条に「～平和で民主的な国家及び社会の形成者として～」と記されています。

その目的を達成するために、知識や教養を身につけたり、道徳心を培ったりするのです。

しかし、そのことが現在の教育課程ではないがしろにされ、「民主主義を学ぶ場、機会」が少なくなっています。むしろ、誤った民主主義に進んでいることがあります。(例えば、多数決絶対主義です)

(注) かつての教育課程では、特別活動として学級指導が年間35時間、学級会活動が35時間計上されており、活発な話し合い活動や学級行事などが行われていた。



2. 私たち全国生活指導研究協議会(全生研)は、「学級づくり」(集団づくり)を提起しております。

全生研の指標には

「～平和と民主主義を築く国民・市民の形成・・・、民主的社会の成員としての諸能力を備えた人間に成長することを追求し・・・、教科指導と教科外指導を相互に充実発展させるとともに～」

とあります。

つまり、学級づくりを通して「民主的な力」を備えた子どもたちを育てていくのです。

3. 「学級づくり」って、何だろう?

「学級づくり」とは、様々な活動を通して学級の構成員の人間関係を再構築していく過程で、様々な民主的な力を身につけさせていく、ということです。

「民主的な力」とは「多数決の原理と同時に少数意見の尊重」「基本的人権の尊重」「言葉と表現の自由」「宗教と信仰の自由」などがあげられますが、子どもたちにもわかりやすく言うと、

□多数決がすべてではない ・少数意見の尊重
・合意で決めるのがベスト ・みんな対等で平等
・みんなが幸福になれる ・意見表明ができる
などでしょうか。

(1) はじめの学級は「群れ」である。

学級がはじまったときの子もたちは単なる「群れ」です。

教師が何もしないと、発言力ある子、人気のある子などが学級をリードして、いつまでもバラバラで一つになりません。お互いのグループが思い通りにならず、不満を抱え、我慢を強いられ、ストレスを抱えて過ごさなければならない状況が続きます。

右の図にある「権力ピラミッド」は温存され、学級に差別が常態化されます。

学級づくりの民主的な実践を通して、その下の図のような「対等・平等な人間関係」にしていくのです。

その過程の中で子どもたちは「民主的な力」を身につけていくのです。

(2) 「学級づくり」は教師がはじめる。

学級づくりは、権力の一番上にいる教師がリーダーとなって子どもたちの前に登場し、ねらいをもって、意図的計画的な展開を組んで進めていくことです。そうすることによって学級は育っていくのです。

そして、教師は子どもたちの成長を見ながら徐々に子どもたちに任せていくのです。

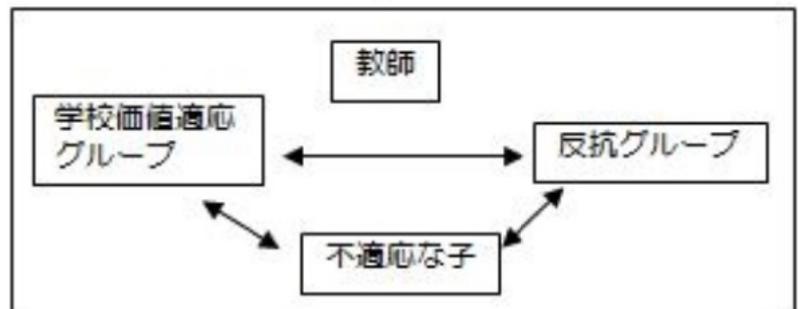
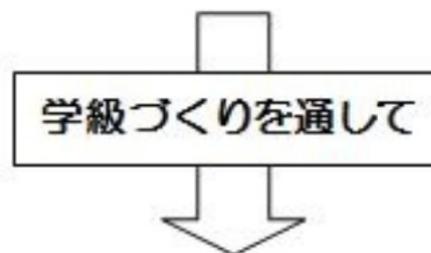
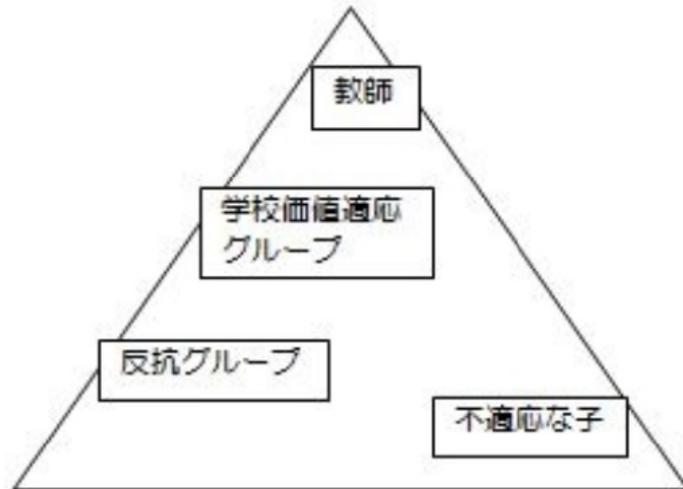
しかし、子どもたちは簡単には成長しません。教師は黒子になり、子どもたちをサポートしながら、子どもたちを前面に立てて学級づくりを進めていくのです。

(3) 全生研ではどうやって「学級づくり」をすすめるの？

全生研では、「みんなが対等・平等な関係の学級」「自治のある学級」などをめざします。

例えが悪いのですが、「小さくて弱い子どもの言うことを、大きく力の強い子どもがきくような対等・平等な関係にするということです。

権力ピラミッド



そのために、

- 「班づくり」
- 「リーダーづくり」
- 「話し合いづくり」を



相互に関連させながら進めていきます。

♥次回は、「班づくり」について掲載します。お楽しみに。

山形県生活指導研究協議会の問い合わせ先

山形	設楽 隆雄	090 - 4479 - 8595
東置賜	高梨 譲	0238 - 52 - 2284
田川	山崎 馨	0235 - 25 - 9527
最上	大沼友有子	0233 - 75 - 2501
北村山	植松 保信	0237 - 47 - 2572
事務局	大場 理之	080 - 5561 4745

本の紹介

絵を聴く保育

—自己肯定感をはぐくむ描画活動—

中山 ももこ

2016年7月30日発行
価格1600円 かもがわ出版

この本の著者は保育士です。この人になら自分をわかってもらえる、まだ自分のことを言葉で十分に伝えられない幼い子どもにもそう思わせるそんな魅力を持った人です。輝くような笑顔で子どもをそばに寄り添い、子どもが自分の描く絵を穏やかに聴く中山さんの姿に安心感を抱くのはもちろんのこと、その土佐弁の語り口に思わず引き寄せられるその力はいったいどこから生まれたのか、どうしたら子どもとそういう関係を作り出すことができるのでしょうか。

◆絵を聴くとは

「絵を聴く」とは、子どもが描くときに保育者が「何を描いたの」「そうだったね」「どんな気持ちだったの」と会話を膨らませながら聴くことです。そし

てそれは子どもの描画の世界を広げます。「絵を聴く」ことで、保育者にとっても子どもにとっても互いの信頼感と自己肯定感が育ちます。

子どもの描画活動は、認識力と様々な感覚や機能の発達と結びついていきます。そして描画活動の基礎をなすのは、充実した保育の場であり、その中で子どもが様々な人間関係を学び人格を形成していくことです。

中山さんと子どもたちは高知県という恵まれた自然環境の中でかっぱや天狗や鬼や忍者とともに日々活動しています。一見すると理想郷のように思えるのですが、都市と地方の差はあれ、経済格差や家庭崩壊の波に洗われ苦悩や悲哀が見え隠れしている現実は変わりません。

◆「聴く」から始まる人格形成

一対一で子どもの「絵を聴く」を通して「子どもがどう育っているか」子どもと対話をしながら理解を深めていくということは、実は幼児期だけの手法ではないと気付きます。

「絵を聴く」ことは幼児期だけの方法ではなく、思春期・青年期にまで影響を及ぼします。子どもの「絵を聴く」ことはその時期に乗り越える発達課題をも含有していると中山さんは示唆しています。

◆人間にしかできない関わり

高知が生活綴り方運動の一つの拠点であるということ鑑みると、こういう育ちをしていくことのできた子どもが小学校に入り、優れた作文を書くことができるという事実も単に描画活動だけにとどまらないということが理解できます。

実際に作文指導を振り返ってみても個人指導の時間を作ることとは容易なことではありませんが、それを保育の現場で描画の聞き取りを続けるということは

やはり容易なことではないかもしれない。しかし一人ひとりの子どもを慈しみ、じっくり付き合う人間関係を幼児期から構築していくことが人格を形成する上でいかに必要なことであるか、子どもの「絵を聴く」ことでそれがわかります。だからこそ保育者たちがこの「絵を聴く保育」の世界を共有しているのだと思われのです。

先進的な研究として、AIにできないこととして「非認知能力」の一つの「アート」の力が注目されています。その土台となる愛着形成の一つが「絵を聴く」ということです。

今、保育者だけでなく教育・保育に携わるすべての人に読んでもらいたい、そんな魅力の詰まった一冊です。(三村彩子)

